

石門心学における宗教体験とその言説

澤井 努

『都鄙問答』(「性理問答ノ段」)において石田梅岩は、仏教における悟りの境地の差異を挙げ、修行が熟して到達するところの一つであり、「法性ヲ覚ル」より他にないと明言している。梅岩による仏教の理解が示唆するように、梅岩の孫弟子にあたる中澤道二(一七二五—一八〇三)は、石門心学に入門する以前に透徹した悟りの境地に到達していた。道二の宗教体験を構造的に分析すれば、三つの段階とそれに先立つ前段階に区分することができるであろう。

道二の生家は機織を生業としていたが、道二の家は「はなはだまづしく、平日書をよむいとまもなく、故に文字には疎く、「遂に学びの道に入るの暇」がなかったという。また道二の家は先祖代々、日蓮宗の信仰に熱心であった。そのために、幼少の頃から道二は、両親がどうしてこれほどまでに日蓮宗に帰依し妙法を尊信するのか、また妙法とは一体何であるのか、と絶えず疑問を抱いていた。十二歳の時、同職の家に奉公に出たが、その家も日蓮宗を信仰していたという。道二は、こうした生活環境が「大悟道の基」になったと回顧している。その後、十九歳の頃から日夜工夫をするようになっていた道二は、二十五歳の頃からは、家業の合間に講釈や講談を聞き、さらに妙法の二字を念頭に置きながら修行に励むようになった。以上の経験は、悟入への精神的土壌を形成したと言えよう。

明和二(一七六五)年十一月、道二が四十一歳であった時、西山等持院の東嶺禪師の法席に列席した。禪師の説法に「何と

なく精神の澄みて尊く覚へ」た道二は、毎日聴聞するようになったが、ある日、禪師の大喝叱咤に遇う。禪師に「妙法」に対する気付きを指摘され、それに感銘を受けた道二は、七日間の静坐工夫の後、十一月十一日、豁然と「妙」の理を「発明」し、「即身金色の弥陀」であることを会得したと述べている。この宗教体験(第一段階)をとおして道二は、いわば主客未分の境地に到ったということができよう。

また、宗教体験の第二段階(明和三年四月の廁の中)において、道二は「法」の理を「発明」する。さらに廁から出た時、鳥のカアカアという鳴き声によって「一天四海皆帰妙法」を会得したという。この段階において道二は、東嶺禪師が述べた「魚は水に住て水を知らず、人は妙法の中に住して妙法を知らず」という言葉の意味を体解したと考えられる。つまり、魚が「水」を認識しないで生存しているように、彼自らも「妙法」を認識していない。道二の存在は宗教体験の第一段階と同じ主客未分の境地であるが、その「主客未分」によって表現される意味内容はあまりにも深淵である。

宗教体験の第三段階において、道二は東嶺禪師に師事し(「坐禅弁道」)、悟境を深化させていった。残念ながら、禪師とのやりとりの内容を十分に知ることはできないが、「東嶺禪師に従つて坐禅弁道せられ、霜辛雪苦年を久ふし遂に難透難解の話頭を咬破し、向上の則をも透過」したとある。故に、石門心学に入門する以前に、道二は臨済禅において相当な悟りの境地に到っていたのである。

その後、道二は堵庵の教導によって梅岩の教学に確信を覚

え、儒教における性理説を学んだ。その結果、「性理の蘊奥」を極めるに到ったという。道二は「文字には疎」だったために、梅岩や堵庵が語るような学問的素養がなかった。そのために、石門心学に入門するまでは、自らの宗教的な境地を体系立てることがなかったのかもしれない。しかし、布施松翁の勧めによって堵庵心学を学び、人の人たるあり方を言語化するための理論的基盤を獲得した。つまり、道二は禅によって到達した宗教的境地について、堵庵が説く儒教によって論理的な意味づけを行ったと言えるであろう。

経営倫理における石門心学の意義——現状と展望——

中道 豪一

いわゆる「経営倫理学」は、二〇世紀後半の三〇年に起こった学問的・社会的動向に起因すると言われている。特にアメリカで発生した経営倫理の運動が有名であり、梅津光弘はそれを「哲学・倫理学の背景」「経済学・経営学の背景」「実業界およびアメリカ社会一般からのニーズ」(『経営倫理』第二章・梅津光弘)という領域の学際研究として成長する過程を指摘する。

学の研究対象である「経営倫理」だが、日本では「Business Ethics」の訳語として用語が成立した事情から、時には「企業倫理」と表現されるものと内容が重なる場合がある。この併用を否定する気はないが、法令遵守 (compliance) とえれば、どんなビジネスをしても良いという悪解釈を回避するためにも、経営倫理・企業倫理はCSR (corporate social responsibility: 企業の社会的責任) 概念を含んだ「Management Ethics」

を本質として理解すべきと考える。

杉本泰治は企業倫理について「生き残りの条件」を満たす必要があると説くが、そうした状況下で石門心学はいったいどのような意義を見出されているのだろうか。芹川博通は経済倫理の淵源として評価し(『いまなぜ東洋の倫理か』北樹出版、二〇〇三)、日野健太は現在の企業倫理を考える一例として評価するが(『石田梅岩の企業倫理』『江戸に学ぶ企業倫理』生産性出版、二〇〇六)、注目すべきは平田雅彦のCSRと関連させて石門心学を評価した『企業倫理とは何か』(PHP研究所、二〇〇五)である。

平田は企業の存続には「持続可能性」「ステークホルダーとの相互関係の深化」が不可欠であり、その際に必要なのがトップ経営者の倫理観に基づく「自発性」だという。そしてそこで必要とされる「欲求と倫理のバランス」を培う素材として石門心学を評価している。その論考では商人の存在意義、コスト管理の意味、企業利益の意味、自然の理法と経営思想の関係、CSRの意味、持続可能性の意味といった現代的関心から、石田梅岩の言説が消化されている。梅岩の説いた「人の人たるの道」に立ち返り現在を見るわけである。こうした平田の見解は、おおむね石川謙・竹中靖一・柴田實といった先行研究の成果の上に展開されていることから、経営倫理における石門心学の評価としても有効と考えられる。

こうした現況を踏まえての展望だが、この平田によって示された切り口を深め、「欲求と倫理のバランス」を整える、より良い方法を模索する方が考えられる。この点に於いては石門